

うまい!

岩船米づくり情報 No. 3

平成30年4月
岩船農業振興協議会作物部会
村上農業普及指導センター

好天日田植えと保温的水管理でスタートダッシュ

— 重点事項 —

- ◎ コシヒカリは5月10日頃以降の好天日に田植えを行う。
- ◎ 活着までは保温的深水管理、その後は浅水管理で分げつ発生を促進する。
- ◎ 除草剤を適正に使用し、除草効果を確保するとともに、薬害の発生を防止する。

1 適期田植え ～いい日旅立ち、好天日田植え～

- 5月の天候は、平年と同様晴れの日が多い見込みです。また、気温は平年並または高くなる確率が高い予報がでています。天気は数日の周期で変動するのが一般的です。風の少ない、晴れた日を選んで田植えしましょう。
- コシヒカリの早植えは出穂期が早くなり、高温登熟となりやすいことから、乳心白粒の多発生による品質・食味の低下を招きます。



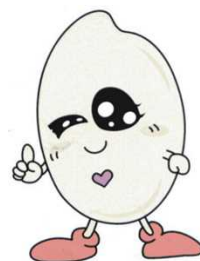
品質・食味の高い「岩船米」を生産するため、早生は5月5日頃以降、**コシヒカリは5月10日頃以降の好天日に田植え**を行いましょう

- 密植・大苗で植えると、細い茎が多くなり、倒伏しやすくなるほか、ヤセ米や乳心白粒が増加します。
- 適正な植え付け姿勢で早期活着できると、質の良い茎ができ、質の良い籾が多くなり、登熟も高まり品質が向上します。



1株 3～4本植えとし、コシヒカリの栽植密度は**50～60株/坪**、早生品種では60～70株/坪を目安に植えましょう

- ①田植えの4～5日前に箱当たりチッソ成分1～2gの弁当肥を施用し、活着・初期生育を促進しましょう。
- ②昨年イネドロオウムシ等の害虫被害が多かったほ場では、殺虫剤を箱処理しましょう。



2 田植え後の水管理 ～活着促進・初期生育促進のポイント～

- 品質のよい米を生産するためには、早期に分げつを発生させることが重要です。この時期はまだ用水が冷たいので、「早朝のかん水と日中の止め水」を励行しましょう。

☆ 植え傷みを防止し、初期生育を促進するためには？

- ① かん水は早朝に行い、日中は止め水として水温上昇と保温に努める。
- ② 活着までの間は、やや深め(3～4cm)の水管理で苗を保護する。
- ③ 活着後は、浅水管理(2～3cm)で水温上昇を図り、分げつの発生を促進する。
- ④ 低温や強風の時は、一時的に深水にして保温(苗の保護)する。
- ⑤ ワキの発生が見られたら、夜間落水でガス抜き(早朝かん水)をする。

3 雑草防除 ～ヒエの生長速度は速い～

○ほ場条件・対象雑草に合った除草剤を選び、注意書き（使用時期、使用量、使用方法など）を良く読んで、正しく使いましょう。

☆ ヒエは田植え後5日（代かき後、1週間程度）で1葉になります。

①「移植後〇〇日まで」「ノビエの〇.〇葉期まで」と記載されている場合は、代かき後日数を考慮して、除草剤散布を遅れないように注意しましょう。

ヒエの葉齢到達日（田植え後）

ヒエ葉齢	田植後日数	調査方法
1.0 葉期	4～5 日	代かき後 3 日で田植えた場合
2.0 葉期	7～10 日	
2.5 葉期	10～13 日	調査場所：長岡市
3.0 葉期	13～16 日	

気温が高いとノビエの生長も早まります。散布遅れにならないよう注意しましょう！

② 除草剤の種類に応じた散布時の水深を十分に確保しましょう。（特にフロアブル剤やジャンボ剤等は深水）。

4 いもち病の“伝染源”をなくそう！ ～予防が重要～

○いもち病多発生地や前年多発したほ場では、コシヒカリ BL を含む全品種で育苗箱施用剤による葉いもち防除をしましょう。

○新之助等のいもち病抵抗性が弱い品種は、必ず育苗箱施用剤を使用しましょう。

○ほ場に放置した補植苗は、葉いもちの伝染源となるので、速やかに除去しましょう。

5 用水の入替（夜間落水）で根の健全化を！ ～ワキ防止対策～

○稲わらを舂すき込みしたほ場などでは、気温の上昇に伴いワキ（生わら等の分解により発生する有害なガス）が発生し、根腐れや生育停滞を起こします。

○用水の更新（夜間落水）によりガス抜きを行い、根の健全化に努めましょう。

ワキの発生程度とその対策（昭 55、新潟農試）

ワキの程度	ワキの発生程度	水稻生育への影響	6月上旬までの対策
少	水田に足を踏み込むと僅かに気泡の発生がみられる。	なし	—
中	水田に足を踏み込むと気泡の発生が多い。	根の活力低下	用水の更新（夜間落水）
多	水田に足を踏み込むと盛んに気泡を発生する。	根張り不良	用水の更新を繰り返す
甚	晴天時自然に気泡を発生し、音が聞こえる。また水田を歩くと著しく気泡を発生する。	根の伸長阻害 地上部黄化	間断かん水

今年の夏は気温が高い見込み

新潟気象台の暖候期予報（平成30年2月23日）によると、北陸地方の6～7月は平年並みに曇りや雨が多く、その後は晴れの日が多くなる見込みです。

夏の高温は、品質低下を招きやすくなります。良質米を生産するためには、早期分けつを確保した上で、適期の中干しを確実に実施することが大切です。